

玉島港町の衰退

玉島港町の分割

元禄六年（一六九三）十月、松山藩三代藩主水谷勝美の不慮の死後、世継ぎがないために水谷家は断絶した。

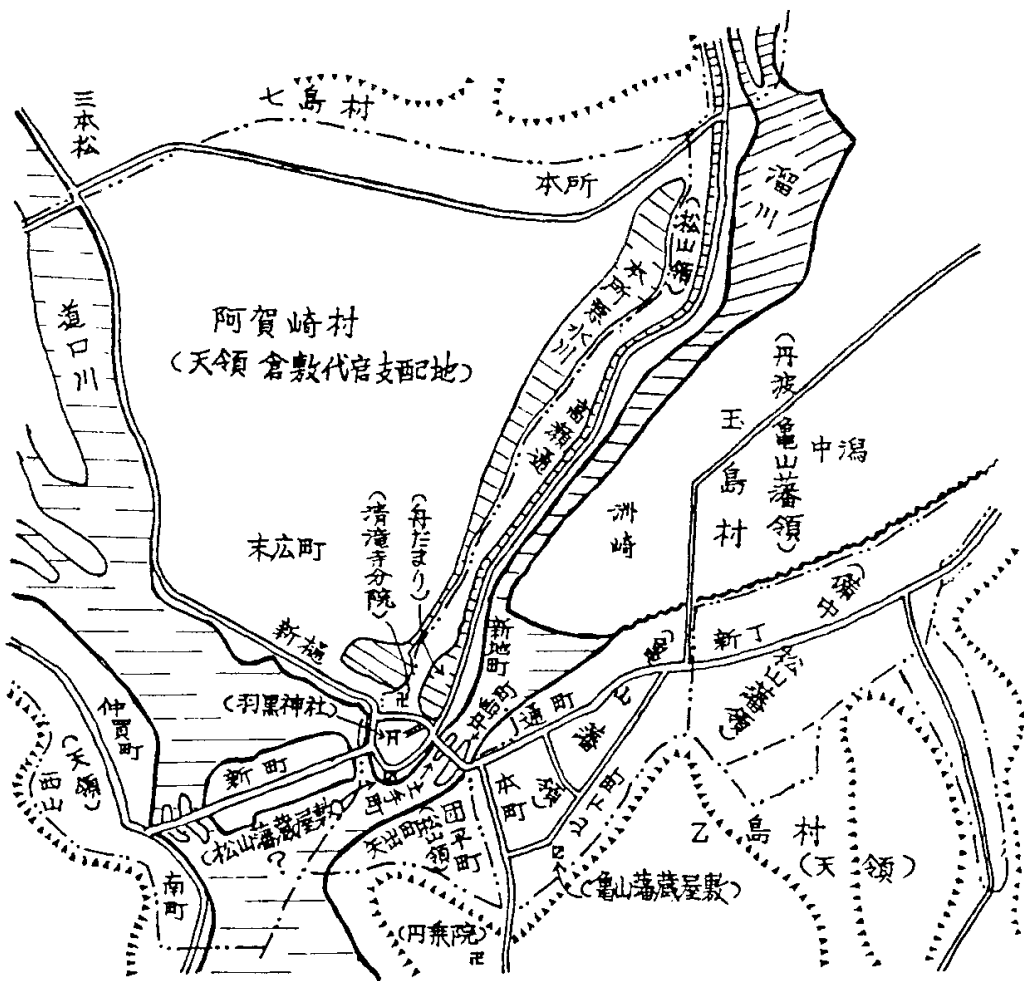
翌元禄七年二月赤穂藩家老大石良雄が収城使として松山城を接收し、引続いて元禄八年八月まで松山城を守った。

元禄八年（一六九五）九月、新しく松山藩主として安藤重博が軫封された。

このとき、玉島周辺における松山領は、玉島村の一部と柏島村の一部とに削減され、その他はすべて幕府の直轄地となった。

その後、元禄十五年（一七〇三）幕府の直轄地をさいて丹波国亀山藩領とし、これ以降、玉島周辺地域は天領・松山領・亀山領と三藩に

よる分割支配地となり、明治維新までの約百六十年間にわたって続くこととなった。



玉島湊町分割支配畧図 (幕末のころ)

(H元・1・30 渡辺作図)

その結果、玉島港及び港町は「三ヶ領軒並入組」として運営されることとなった。

天領（倉敷代官支配）……阿賀崎村のうち、
新町・南町・仲買町——「西浜」と呼ぶようになった。

松山領（安藤氏↓石川氏↓板倉氏）……

玉島村のうち、中島町・矢出町・岡平町・土手町

亀山領（青山氏↓松平氏）……玉島村のうち、

本町・通町・山下町

——松山領・亀山領の港町を「東浜」と呼ぶようになった。

三ヶ領に分割されてからは対立意識も強くなり、港全体の統一がとりにくくなり、ことごとくに疑惑や争いごとが発生しやすくなったようである。

東浜問屋の不正取引による

新町問屋との反目・抗争の例

『玉島村中島町の漁屋弥一郎が明和年中（一七七〇ころ）に問屋になったのは領主（松山藩主板倉氏）へ掛合の上であるが、新規に問屋を願出するには玉島港問屋仲間との合議によるべきなのに、新町問屋共には何ら申出がなかった。

その上、筑後国嶋堀切村の船頭新作は竹屋徳右衛門の取引先であるから売買しないことを断っておいたのに、西大島村の孫七郎の名前で繰綿を売渡したり、播州本庄村七兵衛外一人も播磨屋七右衛門取引先であるから差留めておいたのににもかかわらず、売捌いたことなど旁々不埒につき、問屋株取放しの上、過料錢五貫目仰付られた。

（後略）』

文化年間（一八一五ころ）、新町問屋からの訴訟によって、倉敷代官所によって決裁が下された。

特に新町問屋は天領という立場を背景にして、松山・亀山領のいわゆる東浜問屋に威圧を加え、

不正な取引きを摘発したり、また、時には株仲間からの追放をするなど、西浜の優位性を誇張してきた。

また、町人の間でもいつしか西浜と東浜とは対立するようになり、港内の川がえや湊がらえ工事・水門工事などの計画・諸経費負担の調整など問題がむずかしかつたばかりでなく、三藩の許可がそれそれにより必要ということで、これの連絡調整が大へん複雑面倒などと、支障が多かった。

玉島港の土砂埋積のため
港の底がえ計画
〔安永5年(1776)の記録〕

湊の長さ 1382間
(約2500m)
幅 155間 (約280m)
面積 144624坪
(約4770アール)
深さ 水尾 5尺 (約1.5m)
磯 3尺 (約1m)
平均 4尺 (約1.2m)
人夫 延 723.122人8分
船 15石積 50隻
賃金 867貫742匁3分6厘
(約1200万円)
但 1人 1匁2分宛 (1.500円)

玉島港衰微の原因

いくつかの原因が考えられる。その主なものを取り上げてみると、およそ次のようになる。

(1) 港に土砂が流れこんできて浅くなったこと。

鉄の需用が増大して、吉備高原での砂鉄採集が盛になって、その「かんな流し」による多量の土砂の流下と、さらに花崗岩地帯のためには、げしい風化作用ということが、洪水のたびに、おびただしい土砂が下流に押し流され、高梁川の河口周辺に堆積し、三角洲を作り沿岸を埋めていった。

また、里見川・道口川などの土砂が、直接玉島港に流れこんで、港の底を浅くし、千石船の入港を困難にさせた。

文化六年(一八〇九)松山藩の記録によると、御蔵米を積む大船はおよそ五十町(約一キロメートル)の沖合で船積みしなければならぬ程に港が

浅くなつた」と伝えている。

その上、三藩によつて港が分割支配されたことによつて、港の統一的な発展が阻害されただけでなく、港全体の問題である水門工事や港の浚渫などの管理運営について、いちいち三藩の各領主の許可をもらわねばならず、さらには多額の費用の分担調整などと難問が多く、港の浚渫などは十分に行われていない。

(2) 繰綿の品質が次第に悪くなり信用をおとした。農民が繰綿に水を入れて掛け目を増やし、消費地の信用をおとした。このため綿問屋の取引高が減少した。

一俵で二百く三百匁目(約一キログラム)程度も減っている有様で、問屋は口銭の中からつぐなっていた。

明和・安永のころ(一七五〇ごろ)から水綿みわたを取締つたが、なかなかあとをたたなかつたという。

(3) 油物の取引が統制されて売買ができなくなつたこと。

宝暦以降(一七五〇)幕府は全国……特に西日本の菜種子、綿実などの榨油原料を、摂津、河内・和泉の問屋に集荷させ、他国における取引を停止した。

このため、それまで九州の油物と備前備前の綿との交換売買を主としていた玉島港は大きな痛手を受けることとなった。

九州の油物を積んだ船は大阪に直行して売渡した。そして繰綿は大阪、播磨の望津・高砂、讃岐の高松などから仕入れられるようになった。

こうなると、瀬戸内の廻船航路から七く八里(約三〇キロメートル)も奥まつた玉島港へわざわざ入港する他国船が少なくなつてきた。

(4) 付近に港ができて競争がはげしくなつたこと。

十八世紀の終りごろには、備前児島郡の藤戸ふじの天城あまぎの両港が新しくできて、早島を中心とする綿の重要な生産地をこれらの港にうばわれた。

また、十九世紀の初めごろからは、連島西之浦、浅口郡寄島の港も発達して、大いに利用されるようになった。

奥まった港の不便さに加えて、港が浅くなった玉島港としては、全く手の打ちようがなくなつた。

鮑あわび 周防すおう 鯖さば 近江おうみ 鮒ぶな 深ふか 鯉こい

範圍防鯉の新産程

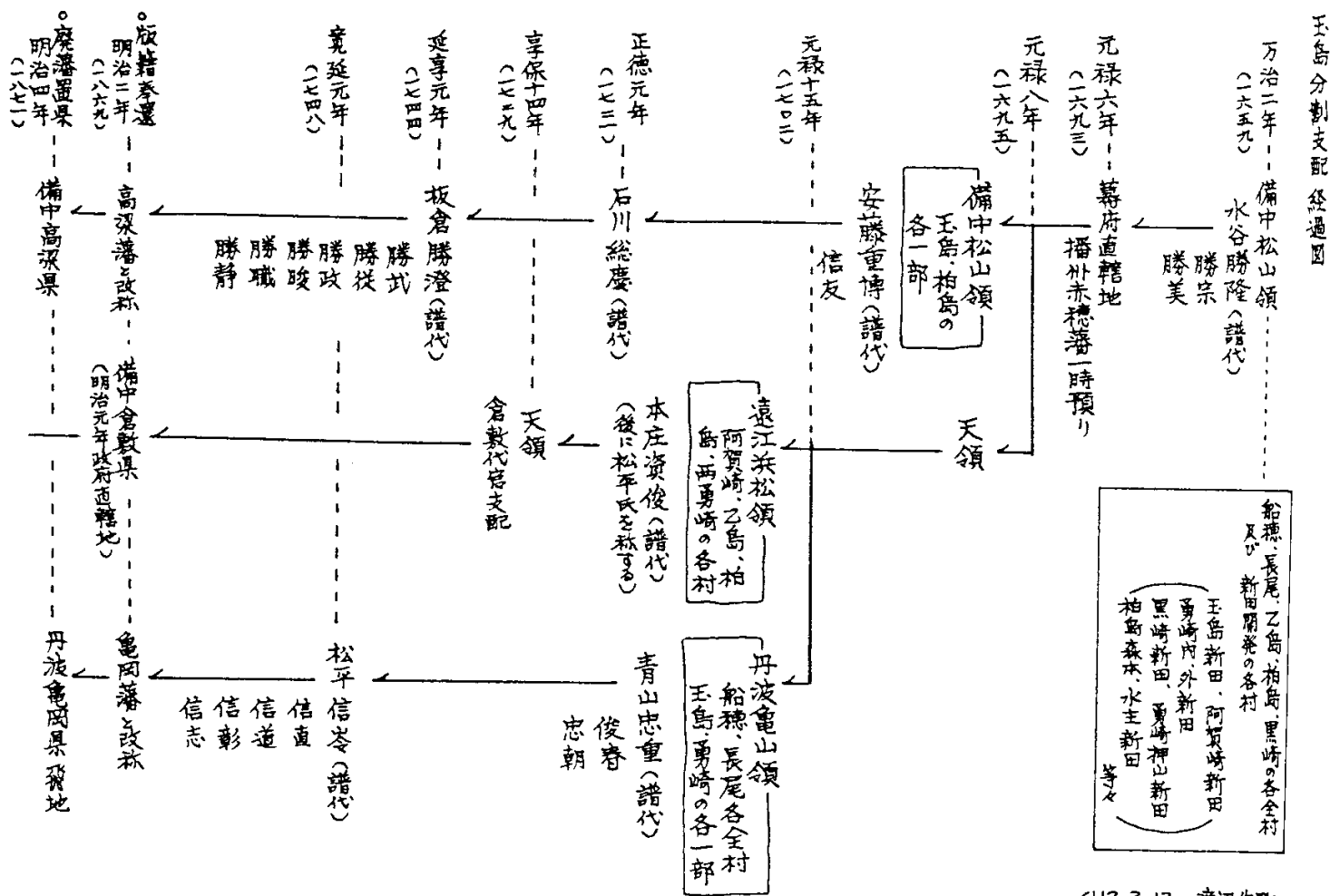
土佐材木 安藝あま 桶おけ 能登のの

土佐材木安藝桶能登

釜 河内 鍋 備後 酒 和泉いづみ

釜河内鍋備後酒和泉

古文書縮小複製版部分(3)
112ページの続き



備中松山城の神隠し物語

今は昔、備

中松山藩主

水谷家三代

で断絶という、世にも不思議で深刻な物語。

時は元禄六年（一六九三）十月六日早朝、水谷家三代目藩主出羽守勝美が、俄に姿を消したことに始まる。

家中一同あわてふためいて、城内を隈無く捜したが、皆目行方がわからず、神隠しと騒ぎは大きくなるばかり。遂に城代家老水谷信濃守勝^お阜は、箱口令^{かんこうれい}をしき、事実が外に漏れるのを防ぎ、幕府へは、藩主急病と申立て、急拠、後嗣に弥七郎勝晴を選んだ。

水谷家では、毎月六の日には臥牛山頂^{がぢゅうざんちゆう}の天守閣での祭祀に臨むため、藩主は山麓の屋敷から山坂道を天守閣まで登城するのが習わしであった。十月六日もいつものように、勝美はわづかの侍臣を伴って一人天守の間に登り、それ

きり消息を絶ってしまつたのである。

取りもあえず重臣一同緊急召集のもとに、重苦しい雰囲気の中で協議が重ねられ、一時は、藩主勝美の弟・江戸家老職の勝時が挙げられたが、反対もあつて結局は、勝美の従兄弟にもあたり、また城代家老勝阜の子ということでの養嗣子・弥七郎勝晴^しが選ばれた。

これにはまた、失踪した藩主勝美の居室から遺書が発見され、この五年の間、嗣子が生まれぬ時は、弥七郎をもつて後嗣とする旨が書かれていたことにもよるといふ。

ところが……御家安泰の喜びもつかの間、五十日後の十一月二十六日、またまた世嗣したばかりの弥七郎勝晴——十三才の少年であつたという——が失踪したのである。

二代続いての藩主失踪事件……まことに奇怪な出来事であるが、その裏に、みにくいま

での、世襲の秘話がかくされていたという。

事の起りは、二代目藩主水谷左京亮勝宗が、世嗣として藩主になった時にさかのぼる。

城代家老水谷勝^{かつお}阜の父勝能は、藩主勝宗とは腹違いの兄弟で、しかも勝能の方が年長でもあった。

しかし、勝能の生母の生まれが賤しいという理由で、家督は勝宗にゆずられた。

時に寛文四年（一七六四）七月のことであった。



松山城 天守閣

ここに、腹の虫が収まらないのが、城代家老の勝阜である。

世が世であれば、とくに三代目藩主勝美のかわりに藩主の地位にあったはず……と。そこで、秘かに藩主勝美を殺害した。といわれていいる。

ところが、目には目、齒には齒と復讐が行われたのである。

藩主勝美の失踪という急使に、江戸家老職水谷勝時は急遽、江戸より松山に下向した。

ところで、江戸時代の城には、いろいろなからくりがあった。特に万一に備えての秘密の抜け穴が造られていて、極くわずかな者しか知らされていなかった。

松山城にもこの秘密の抜け穴があって、藩主勝美とその弟勝時及び城代家老の勝阜と三人だけであった。

松山城へ下向した勝時は直ちに、兄勝美の失踪の謎を解くために、秘密の抜け穴である間道を隈無く調べ、兄勝美の死体を発見した。しかし、反って嫌疑をかけられる恐れが多分にあつたため、勝時は黙して秘かに謀略を練つたのである。

そして、毎月六の日に松山城天守閣に藩主ただ一人祭祀に赴くわずかの間を利用して、弥七郎勝晴を略奪して、同じ間道に隠したのである。

松山藩主水谷家三代と世に伝えられているのは、四代目藩主弥七郎勝晴の養嗣子の願いを幕府に出したばかりで、正式の承認を得ないうちに失踪したためである。

かくして、水谷家は世嗣のないまま、に断絶となった。しかし、勝美の弟勝時は家名のみを継いで、二千石の旗本に列せられ、川上郡布賀に知行所を給せられた。

松山城並びに藩領接收に立ち合った赤穂藩大

石内蔵助は、この間道のからくりを発見するとともに、遺体を発掘したといわれている。しかし、すべては極秘の事件として伏せられ、わずかに松山城下町では巷の風聞として、奇怪な神隠し話として流れたが、それもいつしか消失してしまった。

水谷氏家系図
(H2-3-11 渡辺作図)

